

⑤ 各科生徒級別現員表

区別	日本画科		油画科		彫刻科		彫刻科	
	特別学生	本科	特別学生	本科	特別学生	本科	特別学生	本科
一年	二四	二四	四六	四六	八	八	一五	一五
二年	二七	二七	三七	三七	六	六	一五	一五
三年	二六	二六	三六	三六	七	七	一六	一六
四年	一九	一九	三四	三四	七	七	一七	一七
計	九六	九六	一五三	一五三	二八	二八	六三	六三
研究科	二	二	二	二	三	三	二	二
小計	九九	九九	一五八	一五八	三一	三一	六五	六五

昭和二十年四月一日

草野和郎	魚田耕作	成木浩二	亀川豊	柿沼淳	奥野安五郎	岡村勳	十二町三	豊田仁三	細井督三
新潟	和歌山	岐阜	東京	埼玉	福井	兵庫	富山	兵庫	長野
同	同	同	同	同	同	同	同	同	同
三	沢登吾	森清治郎	広場美治	新川昭一	佐藤仁	齋藤満	上野正之助	浅野逸雄	安田寛
三	菅昌次	福	東京	東京	宮城	青森	山口	愛知	和歌山

⑥ 終戦直後の卒業

昭和二十年九月二十四日、敗戦の衝撃と混乱のなかで次の六名が卒業した。

油画科 細小路 真
師範科 海老沢 殿夫

齋藤 英一
羽石 清
若林 稔

卒業証書授与式は行われず、単に証書が手渡されただけだった。そのときの状況について某氏は次のように語ったが、恐らく他の生徒も同様の心情だったに違いない。

総計	師範科	聴講生	選科	特別学生小計	本科小計	建築科		工部科	
						本	科	本	科
一六八	二二	四一	油一	油一	一四六	一九	六	九	一〇
一八〇	二三	一	油一	油一	一五二	一四	一	一〇	七
一六九	二七				一三八	一八	六	六	六
一二〇	五				一二四	一〇	六	三	三
六三七	七七	四	一	五	五五〇	六一	三〇	三二	三二
二四						〇	〇	〇	三
六六一	七七				五六〇	六一	三〇	三五	三五

私は四年生のとき兵隊に行った。終戦後暫くして学校へ行って見たが、教室にはまだ二、三人の生徒しか居らず、学校はガランとしていた。久しぶりなので教官室に顔を出した。するといきなり「君、丁度よかった。卒業証書ができてるので持って行き給え」と言う。私は兵隊に行っていたため卒業に備するだけの勉強はしておらず、卒業したいとは思っていなかったので心外だったが、当時は敗戦のショック（今の人に説明しても理解して貰えないだろう）で教師も誰もみな茫然自失していて、ものごとにごう対処してよいか判らないといった状態であったし、私にしても、ただ死なずに帰れた感慨をかみしめるだけだったから、文句の言いやうもなく、一種あきらめの気持で卒業証書を受け取った。ただし、その後も学校に通い、一カ月くらいして生徒がポツ／＼と戻り始め、二、三カ月くらいして頭数が増え、授業が再開されたので、私も授業に出た。学校側もそれを断るわけにはゆかなかったのだろう。就職したのは卒業後半年くらいたってからであった。当時としては学校の言うとおりに卒業せざるを得なかったが、今思えば不満は多々ある。

⑦ 概況 (一)

昭和二十一年一月八日発送、「外国人教師ニ関スル調、学徒数、校舎、教員数等調ニ関スル件回答」控の記入のある部分を「聯合軍最高司令部関係書類 東京美術学校庶務掛」より転載する。

外国人教師ニ関スル件

一、本校ニ於テハ目下ノ處外国人教師ヲ必要トセズ
二、該当学科ナシ

一、學徒數、校舎、教員數等調 東京美術學校
二、學徒數志願者數等ニ関スル調

(一) 學徒數 昭和二十年十二月現在

	第一學年	第二學年	第三學年	第四學年	研究科	計
男	一八一	一七八	一六九	一一四	二四	六六六
女	一八一	一七八	一六九	一一四	二四	六六六
計	一八一	一七八	一六九	一一四	二四	六六六

尚此ノ外ニ外地未歸還者五〇名程アリ

(二) 昭和二十年度ニ於ケル志願者數等

1、入學志願者數等 三三六

2、不合格者數 一八九

二、校舎ニ関スル調

(四) 現ニ使用可能ナリ

(四) 現ニ使用可能校舎ノ収容力 學徒數 七〇〇名

三、校舎使用ニ関スル調

(二) 現ニ二校以上ニテ使用中(外事専門學校ニ一部貸与ス)

四、學校以外ノ建物ニ関スル調

(一) 該当建物ナシ

五、教員數ニ関スル調

(一) 昭和十五年四月現在 教授 助教授 嘱託講師 計

二三 一六 三四 七二